

「メディアコミュニケーションのメリット・デメリット」

M085230 大田祐介

1、メディアの発展とそのコミュニケーションの特徴

1968年生まれの私は、電話と言えばダイヤル式の固定電話（通称：黒電話）から、プッシュホン、コードレス電話、ポケットベル、自動車電話、アナログ携帯電話、PHS、カメラ付き携帯電話と、電話の変遷を一通り経験してきた。その間の変遷を見て、電話は音声通話装置から小型のパソコンに変化したと感じている。

パソコンは私が高校生の頃はまだ「計算機」の一種であり、当時Z80というコンピューターを使用して、アセンブラ語により時計の針を10カウント進めるプログラムを作った経験がある。以来、ワープロ専用機、給与計算ソフト・財務会計ソフト（オフィスコンピューター）等を使用している間は、コンピューターは業務上の作業を効率的に進めるための道具であり、コミュニケーションのツールではなかった。

私が「ウェアラブル・コンピューティング」という言葉を聞いたのは3年前であり、神戸大学の塚本教授との出会いがきっかけであった。塚本教授はコンピューターを身につける生活を実践しており、額には常にヘッドマウントディスプレイを装着し、学内では変人扱いされていると聞いた。塚本教授は今から10年前に「近い将来ウェアラブル・コンピューティングの時代が到来する」と予言し、将来は多くの人が小型コンピューターを持ち歩くという下記の「絵」を描き、失笑を買ったと言う。しかし現在、多くに人が携帯電話という小型コンピューターの画面を見ながら町中を闊歩しており、ビジネスマンがノートパソコンを開いている姿も珍しくない。



出典：ウェアラブルの伝道師・塚本教授の予言

http://rikunabi-next.yahoo.co.jp/tech/docs/ct_s03600.jsp?p=000643

さて、業務上及び私生活においてパソコンが欠かせぬ存在となったのは、インターネットの発展に伴うと言える。インターネット上のコミュニケーションも、e-mailや掲示板によるコミュニケーションの草創期から発展期、そして現在に至るまでの経緯を一通り経験してきた。中でも私が多用したツールは、掲示板とメーリングリストである。これらのコミュニケーションの媒介は文字情報であり、じつは過去に何度も人間関係がこじれるような「失敗」を繰り返した経験がある。従来、私はこの失敗を自分自身のメディアの使用における技量不足にあると考えていた。しかし、文字情報のみによるコミュニケーションには限界があり、誤解が生じるのは当然と言える。しかもメディアコミュニケーションの発展が、従来のコミュニケーションを阻害したり、消滅させるような例もある。例えば「ファームバンキング」という企業から銀行へのオンライン振込みにより、私の銀行通いも無くなった。一見便利になっ

たようであるが、振り込み手続きに銀行に行けば、支店長が「お茶でも」と声をかけてくれ、情報交換等も行うことができた。このような対面式コミュニケーションが減少したことは間違いない。

そこで、本レポートではメディアコミュニケーションの発展に伴うメリット・デメリットを自身の経験を元に述べ、今後のメディアコミュニケーションのあり方を論じたい。

2、メディアコミュニケーションのあり方

2-1 ファンスキーの流行

私が経験したメディアコミュニケーションの例を何点か示し、有益なメディアコミュニケーションのあり方について検討したい。

1996年、私は「ファンスキー」という全長が1m以下の珍しいスキーを購入した。周囲に一人も愛好者が存在しなかったので、ダイヤルアップの128kbという低速回線で「ファンスキー」というキーワードで検索を行い、他の愛好者の存在を知ったことが懐かしく思い出される。その当時、全国で推定数百人という愛好者が連絡を取り合い、組織化するのには発展途上であったネットの利用が好都合であった。偶然にも初期のファンスキー愛好者にはネット関係の仕事に従事している人が多く、ファンスキーはネット経由で爆発的に流行した。数年で愛好者は数十万人規模となり、スポーツショップには特売コーナーが設けられた。ネット上に多くのファンスキー愛好団体がホームページや掲示板を開設し、掲示板やメーリングリストにより多くの愛好者が情報交換し、オフ会を兼ねたスキーツアーも頻繁に開催された。私もファンスキーのイベントを企画し、ネット上で参加を呼びかけたところ、はるばる東京や福島からの参加者もあった。この時、日本が急に狭くなったような錯覚を覚えた。ここまでは大成功であったが、IT革命の終焉と言われた2004年頃を境に急速にファンスキーの流行は終わった。今では、あの流行は幻だったのではないかと思えるほどの衰退ぶりである。日本人は飽き易いと言うが、原因はネットやメディアコミュニケーションによる爆発的な流行は一過性のものが多く、おのずと限界があったのではないかと考えている。

2-2 画像伝送装置

次に画像のやり取りが多くの特長をもたらしした例を紹介する。

昭和62年から私の勤務する脳神経センター大田記念病院は、半径40km以内にある15の病院と連携し、CT画像伝送ネットワークを形成した。これは、CT装置の普及に伴い、脳病変の発見率が飛躍的に高まったが、CTを設置しても、脳神経外科医等の専門医は不在の病院が多く、患者に対して適切な対応ができない事が発端であった。しかし、当時の電話回線を通じての画像伝送には1枚当たり45秒かかり、4枚までしか伝送できなかった。それでも伝送件数は7年間で2000例を超え、専門医による的確な助言により、場合によっては当院に転送・緊急手術となった症例も多くあり、病院間の信頼も築くことができた。なお、装置はブロードバンドの出現と共にその役割を終えた。

このような生命にかかわるような画像伝送こそが、メディアコミュニケーションの真髄ではなかろうか。逆に言えば、現在は意味の無い画像やメールのやり取りにあふれており、コミュニケーション機器の汎用化やメモリー等の記憶媒体の低廉化により情報が氾濫し、真に必要な重要情報が埋没している可能性があると言えるのではないか。

2-3 院内専用携帯電話

次に携帯電話によるコミュニケーションでの事例であるが、病院という職場は緊急呼び出しが多く、従来医師は院内専用のポケットベルを所持していた。呼び出しから応答まで、近くに電話機が無ければ1分以上かかる事もざらにあり、この不便さを解消するために院内PHSを導入した。まだ個人用の携帯電話が普及する以前はかなり早期の導入事例であり、院内の連絡が画期的にスムーズとなった。しかし、問題点も多く見られた。私物でないためか、破損・故障が多く丁寧に扱われなかった。また、電話帳機

能等の活用も少なく、会議中でもマナーモードにする職員はまれであった。しかも、導入した担当者に対する評価も低く、子機やアンテナの増設、通話可能エリアの拡大や、音声品質の向上の要求はエスカレートする一方であった。このようにコミュニケーション機器の改善に対する欲求は際限が無く、進化して当然という雰囲気であった。現在ではコミュニケーションが円滑に運ぶ事に対する感謝の気持ちを期待する方が時代遅れという印象を受ける。しかもこの流れが続けば、日本中に道路建設をしたことと同様に、日本中にメディアコミュニケーションの網を張ることが必要になる可能性が高い。それに必要な事業費、税金は膨大な額となるであろう。

2-4 意思伝達装置

次に脊髄損傷患者とのコミュニケーションにおいてパソコンが絶大な威力を発揮した例を紹介する。

従来、交通事故による脊髄損傷にて首から下がまったく動かず、声も出せない患者とのコミュニケーションは、50音順の表を順番に指差す方法や、本人がまばたきする事によりYes-Noを識別するという方法が用いられていた。よって簡単な問答にも相当の時間と労力が必要であったが、通称「意思伝達装置」と呼ばれる「瞬きセンサー」と連動したスクロール機能を持つ50音順表ソフトを入れたパソコンにより、コミュニケーションのスピードと量は飛躍的に向上した。「痛い」「暑い」「寒い」等の簡単なやり取りも命に関わることであり、コミュニケーションの円滑化に両親は涙が出るほど感激した。少量のコミュニケーションにも非常に大きな意味があることも知る経験となった。

2-5 高所登山への利用

最後にメディアコミュニケーションが時と場所を選ばなくなった例を紹介したい。

私の母は2004年に中国（チベット）側から世界最高峰のチョモランマに登頂した。その際のガイドは低温対策を施したPCと携帯ソーラーパネル、衛星携帯電話を持ち込み、8200mの最終キャンプにおける画像の送信と頂上からのメール送信を果たした。この現地からの情報により、日本に残された家族等の応援団は「応援掲示板」によりリアルタイムに登山の状況を知ることができ、隊員も日本から送られるメールにより元気付けられた事と思われる。特に私の母は頂上アタックの最中（標高8500m付近）にて、4番目の孫の誕生の知らせを受けることになった。

残念ながら母は登頂後の下山中に遭難死するが、遺体の搬出を断念するなどのやり取りも衛星携帯電話を通じて行うこととなった。そして、このような山岳遭難事故は現地からの情報の遅れ等により、良からぬ憶測が生じたり責任問題に発展するケースが多い。しかし、本件は現地からの情報発信が多く、遺族とのコミュニケーションも良好であったので、ガイドや隊員の責任を問うことなく事態を収拾することができた。

以上、私が実際に経験したメディアコミュニケーションの実例を数点挙げたが、その利便性と有用性はやり取りされる情報の持つ価値により、コミュニケーションの質は左右されると言える。つまり、社会的に有用な情報や、生命に関わる情報の交換は促進されるべきだが、その他の無意味な情報や悪意のある情報まで頻繁に交換される事により、メディアコミュニケーションによる被害が生じたり、システムの信頼性が問われたり、規制がかかったりする事は不幸なことと言える。

3、メディアコミュニケーションの今後

3-1 メディアコミュニケーションにおける私見

私は18歳頃まではメディアコミュニケーションは必要最小限で良いと考えている。私の中・高校生の頃は、同級生、特に異性と連絡を取るには家庭の固定電話を使用するしかなく、親のチェックが入っていた。また、待ち合わせにおいても、すれ違いは日常茶飯事であり、駅の伝言版等が機能していた。このような苦労を経験したうえで、現在のコミュニケーション機器の利便性を享受している私たち世代と、最初からこの便利な世界に育った世代では大きな差があると考えられる。つまり私達の世代にはコ

コミュニケーションを行うこと自体に大きな障壁があり、それを克服するために様々な知恵を絞る必要があった。それゆえ人間としてのスキルが身についたのではないかと感じている。

私が経験したメディアコミュニケーションの発展には目を見張るものがあり、一時はその発展に無限の可能性を感じた時期もあった。しかし、最近はメディアコミュニケーションによる弊害を感じる機会が多く、規制も必要ではないかと感じている。その根拠は先日の秋葉原の無差別殺傷事件と自分がオーバーラップした経験によるところが大きい。私も加害者と同様、毎年東大に10人以上合格するような進学校に在籍しながら大学受験に失敗し、自動車整備の短大に進学した。その学校は400人の学生の中に女子学生は2名しか在籍しておらず、異性との出会いは皆無であった。そのまま就職すればおそらく自動車ディーラーや整備工場という男性の職場に就職したはずである。10代後半から20代前半にかけて特定の交際相手が存在しないということは、人生や存在を否定されるほどの重大事だと感じるものである。しかも大学受験に失敗という挫折経験と併せて、とてつもなく大きなコンプレックスに成長したと思われる。そこで匿名性の高い掲示板という不満やストレスのはけ口を見出したが、ここでも孤立し、人生に絶望して最終的に凶行に走ったと思われる。この経緯は私の経験と共通点が多いが、幸い私が悩んでいた当時は掲示板等のコミュニケーションツールは無く、生身の人間に直接相談するか、手紙を書くしかなかった。秋葉原事件と加害者と私の違いは、問題解決のための相談窓口の違いであったと思われる。しかも私が選択した相談窓口にはリッチなコミュニケーションがあった。私は10代の思春期から大人として成熟する25歳くらいまでは、文字情報に偏りがちなメディアコミュニケーションより、対面式・対話式コミュニケーションが望ましいと考える。

3-2 メディアコミュニケーションにおける対論

対して主に私より若い世代には、いつでもどこでも誰とでもコミュニケーションを図れる現代のメディアコミュニケーション・ツールはもはや生活の一部であり、今後ともこのツールとは切っても切れない関係であるし、積極的に使用していくことにより、デメリットの部分は改善してゆけば良いという考えがある。

携帯ヘビーユーザーになり、メールの返信がタイムリーに来ないと精神的な不安定をもたらす依存症に近い症状が出現しても、それは友人との絆を深めるために必要であり、回数については「程度の問題」で片づけられる。

また、「裏サイト」という学校の同級生や企業の同僚を誹謗中傷するような書き込みが問題になっても、昔から愚痴や悪口を言う人は存在し、赤ちょうちんで飲みながら愚痴の何ら変わりがないとサイトを擁護する。「出会い系サイト」という、このようなツールが無ければ絶対に出会わない「出会い」が生まれても、以前からあるテレクラやツーショットダイヤルが形を変えただけと容認する。いずれもいじめや売買春を容認することに繋がり、健全な状態とは言えないのではないか。

また、掲示板等を書き連ねられる根拠の不明確な情報も、真偽は読む側が判断すれば良く、規制にはおよばないとの考えもある。しかし、根拠のない誹謗中傷であふれているのが実態であり、多くの人が傷ついている。

3-3 メディアコミュニケーションにおけるメリット・デメリット

結論として、メディアコミュニケーションの発展は止まらないと思われるし、有益な情報のやり取りは今後とも積極的に行われなければならない。そのためには世にあふれる情報の取捨選択が必要であり、従来はマスメディアの特権であった「情報発信」が大衆の手に渡った事に対する規制も必要かもしれない。さらに、最大の問題点である匿名性の排除に取り組まないと、今後ともさまざまな形で犠牲者が出るものと思われる。百歩譲ってもmixiに代表される匿名性が比較的排除されたソーシャルネットワークであれば、深刻な問題には至らないと考えられる。メディアコミュニケーションのマナーやルールの教育や啓発は必要ではあるが、それだけでは効果は乏しく、強権的な規制も必要と思われる。